

鮮烈 菊地久治先生

千葉高昭和43年卒業生同期会事務局編

国語の菊地久治先生が千葉高で教鞭をとられたのは同窓会名簿によると昭和40年1月から42年3月。我々昭和43年卒業生が1年の時はC組、2年の時はB組の担任、そして3年に上がる前に千葉高から去られたというわけです。だから我々の年度しか、その思い出を語れない。しかし、その思い出は鮮烈。

43年同期会ホームページにおける菊地先生の思い出のページは、もの凄い分量です。現実か小説かわからない名作までも生まれています(<http://www.mane-ana.co.jp/chiba43/kikuchi.html>)。

菊地先生の特筆すべきポイントは、後述するように授業をつぶしての読書会(実質は菊地先生による朗読会)。これに対して授業が遅れることに反発する生徒や、その意を受けた学校当局によって排斥されたという噂もすでに伝説。事実は判りませんが、短い在任期間が、この事情を物語っているとも思われます。

ともかくも、今なお同期会HPでも熱く語られる強烈な思い出。教育とは教師の知識、見識、個性をそのまま生徒にぶつけることか…との思いも抱かされます。たとえ受け止める生徒側の受信性能は様々であっても、現に四十有余年に亘って思い出は尽きないのですから。

本稿は、上記サイトに寄せられた同期諸氏の思い出から、菊地先生の授業ぶりを適宜編集して紹介いたします。

1. 読書会

先生の授業で印象的なのは読書会だ。風呂敷に包んだポータブル・レコードプレーヤーを持参され、レコードをかけながら朗読される。どのような本を読まれたかについて各人の記憶が異なるのだが、『トニオ・クレーゲル』(トーマス・マン)、『盲目のジェロニモとその兄』(アルトゥール・シュニッツラー)、『刺青』(谷崎潤一郎)、『春琴抄』(谷崎潤一郎)、『憂国』(三島由紀夫)、『高瀬舟』(森鷗外)などが挙げられている。

まず、「窓側の席の者、カーテンを閉めてください」から始まり、薄暗い中、音楽のボリュームを「どうだ。後ろ、聞こえるかい？」などと確認しながら微妙に調整される。それからおもむろに音楽の調べに乗って朗読される。その朗読も平面的なものではない。

まず、その読書会の雰囲気短編小説に書き上げた同期の筆を借りて紹介したい。

- ノートの自筆原稿を手にした先生は、教卓のポータブル・プレイヤーの針をそっと下ろした。曲の出だしはごく穏やかな旋律だ。生徒五十人の居並ぶ教室後方にやっと届く程度にボリュームが絞られた。チャイコフスキー作曲の「花のワルツ」(注、同期の板見君によればシベリウスの「悲しみのワルツ」であったという。今、聞き比べると「悲しみのワルツ」かと思うが、嶋田君の思い出としてそのまま記す)の導入部が細くゆるやかな旋律を紡ぎつつ生徒たちの頭上へ颯々と流れて行く。正直、ボくら全員が面食らっていた。当の先生は太く短い猪首の顔を虚ろ気にして教壇の側面に凭れ、一体いつ読み出すのか、流れる旋律の行方に

恍惚と耳を傾ける風情であった。これから『トニオ・クレエゲル』を読みます、と言ったのだから何かを朗読するつもりなのだろう。だが、その開始を曲のどの辺に決めてあるのか全く分からなかった。待つ身にとっては背筋がゾクゾクする程にスリングだった。他の授業で一度もこんな思いをしたことが無い。

春に入学して以来すでにボクらは、校風に照らせば明らかに規格外れと知れるこの菊地先生の哀れを誘う寂しげな様子と変人じみた姿とをよく見知っていた。先生は、生徒の要らぬ心配など一切知らぬ気に曲のボリュームを絞込み、レコード盤から針を上げた。微かであった音楽が途絶え、代わりに先生の静かな読み声が流れ始めた。

じっと耳を傾ければ、それは主人公トニオ・クレエゲルが少年の頃に密かに恋したインゲボルグ・ホルムという名の少女との再会場面だ。成人したインゲは、幼馴染みでトニオの友達でもあったハンス・ハンゼンと結婚して、幸せそうに宿のホールで踊っている。静かに朗読が進むうちに、いつしかトニオ自身に変身したかのような先生の声は、インゲに向けて決して届かぬ心の内の思いを、情熱をこめて語りかけてゆく。彼女と共に過ごした少年時代の楽しかった一日を振り返り、実らぬ片恋を告白してゆくのだ。空しいトニオの思いに、先生はご自身を投影していた。

先生は、静かだがよく聴き取れる声音でボクらにこう言った。

「しばらく目をつむって、この曲を聞いてみてごらん」

どうやら、ここは場面転換に余情を添える間奏曲なのだ。下手なラジオ番組より全体の流れを緻密に組立ててある。そしてこの幕間に視線を遠く遊ばせるその立ち姿からして、もしやこの醜男ともいえる中年教師には、美しく成長した北欧系の女性インゲボルグの白い肩に波打ち輝く金髪や、その長身を飾る襷付きのロングドレスの下にある柳腰の輪郭が見えているのでは、とボクには思われた。

やがて、切なく鳴り震わせる旋律の流れは大団円に移り、やや読む声を早め、かつ高めたことでもそれと知れた。そこでは先生の声が少し涙で詰まったように聞こえた。物憂げにゆっくりと教壇に寄った先生は円盤の中央付近で空回りしているレコード針をそっと上げた。それから顔を上げて生徒一同の方へじっと目を向け、何かを期待しているような姿と顔付きで立っていた。ボクらは今何を求められているのか、それは微笑をたたえた彼の眼許を見て分かる気もした。けれど皆は圧倒的迫力の朗読とその切ない余韻に浸り、肩の力を緩めホウッと溜め息を吐くばかりだった。菊地先生は戸惑う生徒の賞賛の声を待ち切れず、ついに御自身でこう言われた。その目に浮かぶ薄い笑みのまま、きっぱりと。

「え、今のは、ずばり良かったらう？」

「そうだろ、違うかい？」とも念を押した。しかし生徒に賞賛を求めた拳句に断じた声音は、少しばかり少年達を小馬鹿にした響きでもあった。「君らには良い作品を恵んでやったのだ、それも解らないのか」という驕りが感じられたのだ。先生は笑みを留めている厚めの唇の端をゆがめるように崩した後はもう笑むことなく、ぴたりと口を閉じた。

「フン、聞かせ甲斐のない子達らしいネ」

そんな感じの遠い眼付きになった彼は、架空の「菊地劇場」から教科書の授業へ戻る合図にレコードブ

レイヤーとノートを風呂敷に包み直した。(嶋田正文『朗読劇場』より抜粋)

この読書会に対して、鈍才は国語の授業が代替されることの喜びや好奇心からの楽しみで歓迎し、感受性豊かな者はその朗読に新鮮な喜びを持ち文学に目覚める。

一方で先生の風貌や言い方に対して反感を持つ者もいた。菊地先生は生徒に迎合して人気を取ったのではない。市民と芸術家という対立概念を持って、君たち市民にはわからんだろうねというトーンを、感じる者は感じた。また授業が遅れることに不満を持つ秀才グループの反感があったとも聞いている。

同期から、こんな思い出が寄せられている。

- 菊地劇場の「トニオ・クレーゲル」から文学の愉しさにひきいれられ、大学ではドイツ語を真面目にやり、ある程度の初歩文法を終えると辞書を引きながら「トニオ・クレーゲル」を原書で読みました。～中略～40歳になって国際癌学会での発表でハンブルグを訪れたおりにトーマス・マンのゆかりの土地であるリュベックまで足を伸ばしました。友人のドイツ人医師の運転で辿りついてみると現実には何もなくて、トニオもハンスもインゲもいなくて、トーマス・マンの生家は小さな銀行になっておりました。文学に対する菊地先生の情熱を、我々は(全員とまでは言わなくとも)あの時点でもっと評価すべきだったと思います。(甲田正二郎)

また別の読書会の思い出もある。

- おもむろに「今日は谷崎潤一郎の”刺青”を読みます。」レコードがかかる。このバックグラウンドミュージックのもとで朗読が始まる。登場人物になりきって朗読される様は印象的で筆舌に尽くし難い。”刺青”で「親方おやめになって下さい」などと女性が叫ぶ場面などは女性になりきっておられた。(伊藤三平)
- 僕が印象に残っているのは、「トニオ・クレーゲル」と「憂国」です。「憂国」は当時の僕には早すぎたのかも知れませんが、その後、三島にはまったのは明らかに菊地先生の影響です。「憂国」の入っている本を買ってきて、何度も何度も読み返し、その部分だけが手垢で汚れて、すぐにそのページが開けるような状態でした。その本は今でもわが家の天袋にあるはずです。(渡辺章)
- 最後の朗読会は三島の「憂国」だったと思います。これが最後だと告げられたのかどうかも覚えていませんが、「高校の授業時間にこのような小説で大丈夫かなあ」といらぬ心配もし、来るところまで来てしまった事態にも不安を感じました。(佐久間憲子)
- 「高瀬舟」とその続編の朗読はよく覚えています。確か「暗闇の中から声がする」で始まる続編がどこにあるのかと、友人たちと本屋を探し回ったものでした。やがて誰かが「あれは、先生の創作だよ」と。(中台孝雄)
- とときおかしな冗談をおっしゃいましたね。鮮明に覚えているのは、三島の「^{せがきぶね}施餓鬼舟」という短編を

先生が朗読され、それを生徒がノートに書き取る授業でした。何回か続いたと思います。その「施餓鬼舟」の中で、ある小説の名前が出てくるのですが、その小説について先生が「これを読んだ人はいますか？」と質問しました。生徒たちは沈黙。先生は、しばらくして「そんな小説は、ないのです。」「そんな小説は…」のタイミングとイントネーションが抜群なんですね。「施餓鬼舟」は、いまだにこの小説が実在するかどうか確認できていません。収録されている本をご存知の方は教えてください。30何年読みたいと思いつつ読めないでいます。(渡辺章)

この幻の「施餓鬼舟」が何と30年以上たってから見つかったというエピソードも、我々の「思い出サイト」を賑わしたのだった。

- 国会図書館で調べたら、三島由紀夫の「施餓鬼舟」は確かにありました。1956年10月に「群像」の創刊10周年記念号で発表されています。昭和31年にそこに一度掲載されただけだったので、それから10年後の当時だれも見つけることができなかつたのではないのでしょうか。(佐藤仁子)

「施餓鬼舟」の思い出に、先生の朗読を書き写すという授業が書かれているが、これも先生の独創だったようだ。

- 確か先生の朗読をノートに書き写すということから始まったように覚えています。どんな話だったのかは忘れてしまったのですが、三島作品であると教えられたことと、「くらげ」は「水母」、「せがき」は「施餓鬼」という漢字が当たるのだと知ったことだけは思い出せます。2年生のときでした。(佐久間憲子)(注。『施餓鬼舟』の原文に「水母を雲丹で和えたのを」という箇所があった)

概して次のような思い出が多いと思う。

- 菊地先生の授業は風変わりだったけれど、それを邪魔に思う人は私の周りにはいなかった。私もドキドキしながら目をつぶって聞いていた。感想を聞かれると困った。どんな感想も先生から見れば子供じみているだろうと。(佐藤仁子)

一方で、次のような反発もあったのは事実である。

- 私は朗読会についてはとても楽しみにしていたのですが、「君ら市民には私のような芸術家の悲しみがわからないのだよ」という先生のくり返しの断言には若気の至りでいつも反発する気持ちでいっぱいでした。(佐久間憲子)
- 菊地先生の朗読の時間は、私はただ「そんなものか」と聞いていました。「感動させてやろう」という姿勢に、いささかの反発はあったけど、聞いていればそれなり面白い、といったところでした。ところが私の友人の一人に、「キュージが、キュージが…」と、菊地先生の言葉や仕草を真似して馬鹿にする奴が

いました。あのイントネーションとか、ときどきちょっとムキになった感じでしゃべる様子とか、歩き方とか、あざ笑う種にはこと欠かないのです。彼が菊地先生を馬鹿にすると、一緒にいる周りが同調する。それが、私にはひどく嫌でした。と言って「そういう下品な笑いはやめよう」と言うこともできず、結局は妥協して、「～だか？」という語尾を上げる言い方を私も真似していました。その苦い思いが、強く残っています。菊地先生が、授業中に時々窓の外や教室の後ろの壁をじっと無表情で見ていることは覚えていません。(古山明男)

なお、菊地先生ご自身が「朗読の美学」として「千葉高校図書館報 第41号 昭和42年3月14日発行」に記されている文章を紹介したい。

「文学作品の朗読という試みは日本ではそれほど行われることが少ない。詩の朗読会は時々あるようですが、小説の朗読会というのはあまり耳にしません。ところが西洋などでは、散文の朗読も決して珍しいことではないようです。」と書き出して、ゴンチャロフ、トオマス・マンが自作の朗読を好んでいたことを紹介しています。そして、日本のソノシートで聴く自作朗読は原作のよりよき鑑賞を高めてはいないと批判し、またアナウンサー、俳優の朗読も違うと続けていく。そして朗読のポイントは自己の個性のもとに受け取って再現しうる人間理解の深さが大切と書いている。

次にどのような作品を対象として選ぶべきかを述べ、40～50分で読み終える短編、ある劇的瞬間をもった作品、はげしい緊張を秘めている作品が望ましいと書かれている。

また、一部に会話が挿入されていて、一人称形式が良いとも書いている。一方、登場人物が複雑な関係のものは避けた方がいいし、文学的表現は聴いてわかる言葉に置き換えてもいいと書かれています。

最後に、次のような朗読のスタイルを提示されております。これが懐かしい。

「私は朗読会が開かれる理想的な環境というものを空想します。会場は全き静寂と適度の暗さが支配しています。スポットの光を浴びて黒マントをすそ長にひきずりながら、朗読者が舞台に登場して恭々しく一礼すると、聴衆は拍手をもって彼を迎えます。

朗読者は黒い半仮面をつけていて表情を見せない。やがて朗読者から光が外れ作品を象徴すべき机上の花束とか能面とかが青白い照明にとらえられて、闇のなかに浮かんでいます。朗読者には少なくとも、聴衆は闇の底に沈んで見えないのがよい。」

そして効果としての音響について「擬音などはなるべく一種か二種に制限されるべきですし、音楽はごく微かに、朗読のある部分に限って用いられるべきです。つまり単一なる効果を損なわないように最小限度の簡潔さを忘れてはなりません。」そして「朗読の成否は、他ならぬ朗読者にもっともよく分かるものです。朗読のさなかの聴衆の沈黙の質、読了終了直後の会場の陶醉の深さによって、それは手にとるように測られます。すべてはこの最後の余韻のためにあったのです。」と書かれ、朗読は「第二の創造」と位置づけられている。

菊池先生の授業はもちろん読書会や書写だけではなかった。普段の授業風景も紹介しておきたい。筆者は菊池先生と同じく高校で国語教師の道歩んでいる。これも縁というのだろうか。

●「嵐の後に海岸を歩くと様々な物が打上げられている」というエッセイを教科書で読んだ後、「このように無意識の世界が時に真昼の意識をおびやかすのです…」とお説。精神分析についての講義がひとくさりあった後、ポツリと曰く、「『源氏物語』の中にエディプス・コンプレックスを指摘したのは、日本では私が最初なのです。」そうして、いつものように、クスリと微笑まれるのであった。

芥川の『舞踏会』を教科書で読んだ時のこと。鹿鳴館で催される舞踏会に社交界デビューの令嬢明子が仏蘭西海軍将校と踊る場面がある。この東洋の少女が、絵柄の付いた小さい陶器の碗から象牙の箸で飯粒を食べる情景を海軍将校は想像するのだった…という箇所では先生は質問された。さて、この仏蘭西海軍将校の眼には少女の世界がどのようなものとして映ったのだろうか？

何名かの後に私が指名された。決して活発な授業参加者でもキクチ崇拝者でも排撃者でもなかった私はただ戸惑ってゴモゴモと答えた。「童話のようだ、と思ったのかもしれませんが」一瞬、間があった。

「君は、それをどこか他のクラスで聞いてきたのだから？」

「イエ、今考えたのですが、どうしてですか？」

「いや、私もそのように他のクラスで説明したのです」

そう言って、やはり、クスリと微笑まれたのだが、私の胸には、いささかの屈辱感と、かすかな得意とが浮かんだ。(板見潤一「同窓の日々」より)

2. その後の先生

ある同期が、2000年に先生のご住所を探し出し、お会いしたいと手紙を出したら、御返事をいただいた。一部を抜粋すると次のとおりである。先生らしい文章である。

「追憶といふものは、それが懐かしいほど、ちやうど虹の幻のやうなもので、とかく褪せやすく凋みやすく、はかないものでもあるのです。

近づけばそれが見えなくなってしまう、また時と人によっては、いちって散らしてみたいやうな心も、きざしうるものです。

私は、貴方たちがあの頃と同じやうに健やかであるだらうと信じ、またあなたたちも、あの人はいま生きてあるのか、どこにゐるのかなと、折にふれて、ふと思ひ泛かべるていどであれば、想ひ出の花も、なんとかふしぎに生きつづけられるのではないでせうか。

三島さんの最後の小説のしめくりは、ほぼ次のやうな大意だったやうです。

『さういふことがあったと思へば、あったかもしれませんが、無かったといへば、無かったやうでもありますし、しよせん この世のことは、あたかも水に映る月の影のやうなもので、すべては人の心ごころですさかいに……』』

そして、その半年後の2000年12月、医師であり先生と親交のあった同期から次のような訃報が届く。先生は、彼との付き合いがあったので法律用語で言うところの^{えうりよ}行旅死亡人を免れたが、これまた何とも先生らしいご最期と思いました。

- 同窓会HPから、菊地先生が当時も今も大きな関心と好意を寄せられていることを知り、驚きと同時に大変嬉しく思い、私からも同窓生の皆様に追記します。

平成12年12月だったでしょうか、水道橋警察署から深夜突然電話があり、菊地久治さんが水道橋駅近くの路上で倒れており、既に死亡していた由。

千葉高卒後、30年近くお付き合いをさせて頂きながら、最期に何も出来なかった私ですが、A君(註、嶋田君)や佐久間さんなど、多くの同窓生の脳裏にしっかりと生きていることを知り、少し救われるような気がします。

菊地さんが好きだったJ.バタイユの言葉を同窓生の皆様に贈ります。

「エロチシズムとは死に至るまでの生の昂揚である」(高橋良当)

この訃報を見た同期の言で本稿を締めくりたい。

- HPを久しぶりに拝見したら、あの菊池久治先生がおなくなりになっていたという知らせ。しばし、絶句し、やがて涙があふれてきました。

思い起こせば、高校時代のいちばんの思い出と言えば、高校に入った折、最初に担任になっていたのが、1年C組の菊池先生でした。新宿中などという千葉の田舎の中学校から、葛城のあの高台の木造校舎へ。文化の香り高い菊池先生のお話を聞いたとき、子供心ながら強いカルチャーショックを受けました。多くの方が書いておられましたが、「春琴抄」や「トニオ・クレーゲル」などの朗読は言葉がないほど今も鮮明に記憶に残っています。あの朗読ひとつとっても、この高校に入って良かったと今更ながら思っています。ご逝去は本当に残念、冥福を祈るのみです。(日暮高則)